

「イスラエル建国史」

18パレスチナ正面の戦い(1)

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

◆第一次世界大戦に巻き込まれたパレスチナのユダヤ人社会は、ユダヤ人部隊（シオン驃馬隊御）を結成し、トルコと戦う英国を助けることで祖国の建国を目指した。一方、現地パレスチナではユダヤ人追放が続き、残った人々はトルコ軍の陣地構築、鉄道・軍用道路の建設などに徴用されるなど、ユダヤ人社会は疲弊していった。そして、ついにパレスチナも両軍が衝突する戦場となっていく。



スエズ運河（イスマイリア）

大戦勃発後、パレスチナ正面の戦いに積極的だったのは、トルコであった。ドイツ軍顧問団に支えられたトルコ第4軍は、スエズ運河の占領を目的として、参戦直後から準備を進めた。パレスチナの解放は、イスラエルの建国につながるのであるが、その主力となるイギリスは、ヨーロッパ正面とダーダネルス海峡を主戦場とし、その南方ではアジアとヨーロッパを結ぶ大動脈のスエズ運河の安全確保が中心で、パレスチナは副次的に考えていた。

トルコ軍のスエズ運河攻撃

ベエルシェバに集結した兵力2万5,000のトルコ第4軍スエズ運河攻略部隊は、厳粛な出陣式の後1915年1月14日に行動を起こし、北シナイの

地中海沿岸ルートを経由して、運河へ向かった。運河東岸まで約300キロ。部隊は17日間かけて走破し、2月2日未明に攻撃を予定した。

敵の目を欺くため、カンタラなど数カ所に助攻をかけ、その後でイスマイリア正面で渡河する計画であったが、砂嵐のため行動が遅れ、渡河は夜明け後となった。そのため西岸の機関銃に掃射され、さらにグレートビター湖とティムシャ湖に遊弋する海軍艦艇から艦砲射撃を受けた。西岸には2カ中隊がとりついたが、渡河舟艇はすべて破壊され、攻略部隊は1,300人の犠牲を出して退却した。

トルコがスエズ運河攻略の意図を放棄したわけではない。しかし、西岸への渡河舟艇の確保が問題であり、渡



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

河後の西岸域維持も困難であることから、東岸域の占領が今後の作戦目的とされた。これだけでも、運河を経由したインド、オーストラリアからの増援を阻止できる。

補給も大きい問題であった。そこでトルコ軍はベエルシェバから北シナイまで総延長264キロの軍用鉄道の建設にとりかかった。そして、ガリポリ戦の勝利で同方面から兵力の転用をうけ、1916年8月4日に行動を開始した。しかし、第2次攻略部隊は、東岸の占領どころか、そこに到達することすらできなかった。

英・ANZAC軍は、すでにスエズ運河の東岸域に、いくつか前哨拠点を設けていた。トルコ軍は東岸から東50キロのロマニで阻止され、敗退した。

パレスチナ攻略に苦戦する英・ANZAC軍

イギリスがパレスチナ正面の本格的戦闘を検討するようになったのは、1916年になってからと考えられる。1916年1月、英・エジプト外征軍（EEF）司令官は、マックスウェル中將に代わって、サー・A・J・マレー中將（後に大將）が就任し、その指揮下で新しく東部軍が編成された。シナイ・パレスチナ攻略を任務とする部隊である。この指揮官には、チャールズ・ドベルが指名された。ドイツの植民地カメルーン攻略の論功行賞で中將に昇進し、1916年10月に着任した。

イギリス軍も運河東岸のカンタラから軍用鉄道を敷設し、輸送力を確保し

た上で、前進を開始した。そして12月23日にエルアリシュを占領し、その東40キロのラファ域まで進出、ガザ攻撃の準備を進めた。シナイ半島内陸部のトルコ軍拠点も掃討されたので、地中海沿岸のラファと紅海アカバ湾のアカバを結ぶ線の以西、すなわち6万平方キロの全シナイを1917年2月までに占領し、東部軍はいよいよパレスチナ攻略に着手することになった。

しかし、これまで比較的順調にいった作戦は、ガザ攻撃で頓挫した。ガザ周辺の防御が固く、アリモンタル稜線などガザを俯瞰する稜線を攻めあぐみ、4,000人の損害を出した揚句、4月の第1回攻撃は失敗に終わった。8月の第2次攻撃もうまくいかず、実に7,000人の損害を被って、撃退されてしまったのである。イギリスの参謀本部は軍司令官の更迭を考えた。

アメリカのトルコ分離工作とイギリスの立場

アメリカは、1917年4月に参戦した。そのアメリカから見ると、ドイツやオーストリア・ハンガリー帝国と戦う理由はあるにしても、トルコと戦争をしなければならぬ必然性はなかった。そこでウィ



ウィルソン大統領

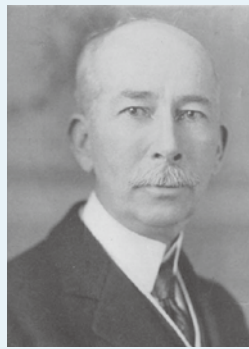
ルソン大統領は、トルコを同盟側から引き離すことを考え、トルコ側との人脈を持つヘンリー・モーゲンソー前駐トルコ大使に、その工作を託した。モーゲンソーは意図を隠すため、トルコ帝国領内に散在するユダヤ人社会の現状調査が目的、とメディアに語った。

しかし、対トルコ戦で苦戦中のイギリスは、モーゲンソーの主旨説明を額面通りには受けとらなかった。ウィルソン大統領は、1915年から1916年にかけて、側近のエドワード・マンデル・ハウス(通称ハウス大佐。ただ

しハウスに軍歴はない)を連合、同盟双方の交戦諸国に派遣して、講和を打診している。

イギリスは、今回の派遣もその流れの中にある、と判断した。しかし現段階での停戦は論外である。ガリポリ上陸戦(ダーダネルス海峡戦)

で手痛い損害をだして敗退し、パレスチナ攻略の前段にあたるガザ攻撃でも苦戦中である。司令官を更迭して攻撃を再興しようとしているところである。現状で停戦すれば、イギリスは対トルコ戦の敗戦国になりかねない。現在進行中のメソポタミア攻略と対アラブ支援も、中途半端に終わる。さらに、トルコ帝国領の分割についてフランスと交わしたサイクス・ピコ密約(1916年の小アジア協定)に、重大な支障をきたす。

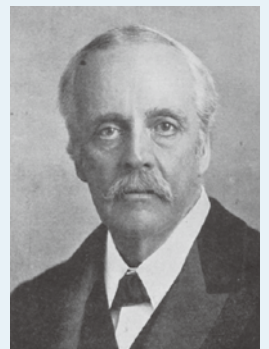


ハウス大佐

ルコ帝国が温存されれば、その前提が崩れる。ワイツマンとユダヤ人社会の有力者ロスチャイルドは、6月19日にイギリスの外務省から内示もうけていた。バルフォア外相の名で宣言を出すというのである。モーゲンソーの行動を阻止しなければならないという点で、ワイツマ

ンはイギリス外務省と考えが一致していた。

1917年7月4日から5日にかけて、ジブラルタルの総督府で二人は会った。結果から言えば、モーゲンソーは論破され、対トルコ交渉を断念した。そして、終生ワイツマンを恨んだ。



バルフォア外相

会談でモーゲンソーは、民主国家とユダヤ人の市民権について言及した。欧米でせっかく市民権を手にしたのに、シオニストは市民権を認めた国とユダヤ人を引き離そうとしている。シオニズムは問題の解決にならない、と述べた。しかしワイツマンは、ロシア、東欧諸国そしてトルコは、そのような状況にはないと指摘し、アルメニア人を初め少数民族の苦悩を語り、次のように主張した。

1. トルコがパレスチナを支配している限り、建国運動に前進はない。
2. トルコが参戦したからには、これを敗北せしめ、帝国を崩壊させるべきである。
3. ユダヤ人社会は武装し、パレスチナ解放のパートナーにならなければならない。
4. これによって、シオニズムは国際社会で独立した政治勢力として認められる。

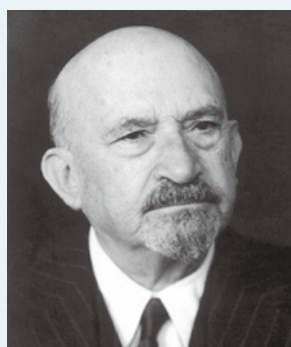
それにしても、イギリスとシオニストは何故こんなに緊密になったのであろうか。そしてワイツマンの言う武装化はどうなったのであろうか。

ワイツマン対モーゲンソー論争

アメリカの真意を察知したイギリス外務省は、表面上モーゲンソーの話を額面通りに受けとめ、シオニスト指導者のハイム・ワイツマン(1874-1952)に、外務省の非公式代表という妙な肩書を与えて、モーゲンソーの意図を阻止させることに

した。

トルコが戦列から離れ、そのまま存続するのであれば、パレスチナにおけるユダヤ人国家の再建運動は停滞する。建国の前提になるパレスチナの解放が折角現実味を帯びてきたのに、ト



ハイム・ワイツマン



ヘンリー・モーゲンソー